

第 61 回クラシックを楽しむ会

2018 年 12 月 16 日（日）18:00～（2 時間 30 分、休憩除く）

タイトル：**バレエ「コッペリア」（ドリーブ）**

会場等：ボリショイ劇場 2017・2018
マリウス・プティパ生誕 200 年記念
（2018 年 6 月 8、10 日）

楽団等：ボリショイ劇場バレエ団、

原振付：マリウス・プティパ、
エンリコ・チェケッティ

復元振付：セルゲイ・ヴィハレフ

管弦楽：ボリショイ劇場管弦楽団

指揮：パヴェル・ソロキン

出演：マルガリータ・シュライネル（スワニルダ）
アルチョム・オフチャレンコ（フランツ）
アレクセイ・ロパレービッチ（コッペリウス）
その他



第 1 幕、麦の穂のバラードの場面

出演者

マルガリータ・シュライネルは 2011 年入団の新星でファースト・ソロイスト。アルチョム・オフチャレンコは 1986 年生まれ 2007 年入団のプリンシパル。アレクセイ・ロパレービッチは契約ソリスト。セルゲイ・ヴィハレフは 2017 年に急死。コッペリア役はエキストラ。



シュライネル



オフチャレンコ



ロパレービッチ

ものがたり

スワニルダの婚約者フランツが心を惹かれた美しい女性は実は自動人形のコッペリア。フランツはコッペリアを作ったコッペリウス博士の家に侵入するが捕らえられる。スワニルダがコッペリアに扮してフランツを救う。

名曲

ドリーブがこのバレエの音楽から重要な 11 曲を選んだ「コッペリア組曲」はコマーシャルなどでよく耳にする名曲。「前奏曲とマズルカ」「チャルダッシュ」「スワニルダのワルツ」「仕事～糸を紡ぐ娘」など

第 62 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：**歌劇「ボエーム」（プッチーニ）**

1 月 20 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ザルツブルグ音楽祭 2012。ダニエレ・ガッティ指揮のウィーンフィル。出演はアンナ・ネブレプコ、ピョートル・ベチャワ、ユシフ・エイヴァゾフ。ムゼッタは美貌の新星マチャイゼ。本場の超！一流のオペラを楽しみましょう。

2019 年 2 月はお休み。3 月以降、ザルツブルク音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」、ザルツブルク復活祭音楽祭 2018 の歌劇「トスカ」、ベルリン国立歌劇場 2018 年 6 月公演の歌劇「マクベス」などを予定。

あらすじ

【時と場所など】

1800年代、ポーランドのガリツィア地方（当時はオーストリア帝国領、現在はウクライナ領）の村

【登場人物】

スワニルダ：お茶目で元気な村娘、フランツの恋人

フランツ：陽気な村の青年、人形と知らずにコッペリアに恋をする

コッペリウス：コッペリアを作った博士

コッペリア：コッペリウス博士が作った自動人形

友人たち：スワニルダの友人たち、スワニルダとともにコッペリウス邸に忍び込むなどスワニルダと行動を共にする

【第1幕】村の広場

人形作り職人の老コッペリウス博士は村人から変人扱いされていた。彼の家の二階のベランダでは、コッペリウスが作った自動人形の少女、コッペリアが座って本を読んでいる。しかし、村人はコッペリアが人形であることを知らない。

コッペリウスの向かいに住む少女スワニルダは明るく無邪気な人気者、陽気な村の青年フランツとは恋人同士（「スワニルダのワルツ」）。ところが最近フランツはかわいらしいコッペリアが気になる様子。それに気づいたスワニルダはやきもちを焼いて二人は喧嘩を始める。

村の人々が広場に集まってきて民族舞踊を踊る（「マズルカ」、「麦の穂のパラード」、「スラヴの主題による変奏曲」、「チャルダッシュ」などが見せ場）。そこに市長がやってきてスワニルダにフランツとの結婚を勧めますが、スワニルダはフランツを信じられず、二人は喧嘩別れする。

コッペリウスは町に出かけるとき家の前でうっかり鍵を落とす。スワニルダと友人たちはそのカギを拾ってコッペリウスの家に侵入する。

【第2幕】コッペリウスの家の二階の仕事部屋

薄暗い室内にはさまざまな人形たちが所狭しと並べられている。スワニルダと友人たちは室内を探索し、コッペリアもまた人形だったと気づく。折悪しくコッペリウスが戻ってきて友人たちは逃げますが、スワニルダだけは室内に身を隠す。そこへフランツはコッペリアに会うために梯子伝いに窓から忍び込んできてコッペリウスに見つかる。

コッペリウスは怒るが、フランツの魂を抜き取って人形のコッペリアに命を吹き込み人間にしようと思いつき、フランツに眠り薬をのませて眠らせてしまう。その一部始終を見ていたスワニルダは、コッペリアになりすまして、コッペリウスを散々からかい悪戯の限りをつくす（スワニルダとコッペリウスとのやり取り、人形たちの踊り「人形のワルツ」が見せ場）。

この大騒ぎにフランツも目を覚まし、コッペリアの正体を悟ってスワニルダと仲直りする。

【第3幕】祭りの日、村の広場

仲直りしたフランツとスワニルダは、めでたく結婚の日を迎え、賑やかな祝宴が始まる。そこへ人形を壊されてカンカンに怒ったコッペリウスが怒鳴り込んでくるが、二人の謝罪と領主の賠償金で機嫌を直し、二人を祝福する。

祝宴も本番となり余興の鐘の祭り（「時のワルツ」から始まり、「あけぼの」「祈り」「仕事」「結婚」「戦い」、フランツとスワニルダのパ・ド・ドゥ「平和」続けてパ・スル「祭りの踊り」が見せ場）、最後は「終曲のギャロップ」でフィナーレ。

ロマンチック・バレエ

ヴェルサイユ宮殿の中で王侯貴族が楽しんでいたバレエは、フランス革命後、ロマン主義の影響を受けて変質し、市民階級が楽しむようになった。**丈の長いチュチュやトシューズ**を用い、軽やかな動作で幻想的な世界を表現する。「ジゼル」、「ラ・シルフィード」などに代表されるバレエを**ロマンチック・バレエ**と呼ぶ。**ドガ**が**オペラ座**でバレエダンサーを描いていた頃、バレエは低俗化し、ロマン主義の衰退と共に 1870 年の「 **Coppélia**」などを最後にフランスではバレエそのものが演じられなくなる。そのころ後進国ロシアではロマンティック・バレエが踊り続けられ、独自の発展をした。ドラマ主体のロマンティック・バレエに対し、物語とは無関係のダンスシーンを取り入れたことから、**クラシック・バレエ**と呼ばれる。



踊りの花形(ドガ、1878年頃)

レオ・ドリーブ

レオ・ドリーブ(1836 – 1891)はバレエ音楽や歌劇で知られるフランス・ロマン派の作曲家で「フランス・バレエ音楽の父」と呼ばれる。優美で繊細な舞台音楽を残した。「Coppélia」の他バレエ「シルビア」が有名である。

「Coppélia」の初演

パリ・オペラ座では、音楽にも力を入れた新作バレエを新進の作曲家、レオ・ドリーブに委嘱する。ドリーブは準備期間を異例の 3 年もかけ音楽を書き上げた。1870 年、皇帝ナポレオン 3 世臨席のもと行われた初演は大成功。



レオ・ドリーブ

「Coppélia」の物語と音楽

ロマン派の音楽に大きな影響を与えた、ドイツの作家 E.T.A.ホフマンの怪奇小説「砂男」は悲劇的な結末の物語。バレエでは脚本を主役の人形 Coppélia を中心に巻き起こるドタバタ騒動の喜劇に書き換え、そこにワルツや、マズルカなど、ショパンなどの影響で、パリの人々にロマン派時代に親しまれるようになった「少し異国風の踊り」をちりばめた。

E.T.A.ホフマンと「砂男」

E.T.A.ホフマン(1776 – 1822)はドイツの作家、作曲家、音楽評論家、画家、法律家。文学、音楽、絵画と多彩な分野で才能を発揮したが、現在では主に後期ロマン派を代表する幻想文学の奇才として知られている。日本でも、夏目漱石「吾輩は猫である」の猫もホフマンの作品に触れて感慨にふけるシーンがあり、森鷗外もホフマンの作品を翻訳している。

フロイトは 1919 年の論文「不気味なもの」でホフマンの「砂男」の分析を行なっている。一度抑圧によって忘れられたものが回帰するときには人は「不気味」という感情を抱くのだとしている。バレエ「Coppélia」およびオッフェンバックのオペラ「ホフマン物語」はこの小説をもとに作られている。



E.T.A.ホフマン